

報告

「大衆化した大学」におけるキャリア教育実践の分析

児島功和¹⁾ 石川勝彦²⁾山梨学院大学経営情報学部¹⁾ 山梨学院大学学習・教育開発センター²⁾

要約：本稿は、選抜性の低い大学におけるキャリア教育授業の分析の試みである。授業内容は、不安定化する労働環境を踏まえたものとした。日頃の授業では、学生の個人ワークや学生と教師の質疑応答を重視し、定期的にミニレポートを課すことで学習習慣形成を促すとともに、知識定着を目指した。受講学生を対象とする調査によると、ほとんどの学生が授業に対して肯定的評価をしていた。学生の学力やキャリアレディネスと学習成果の関連を調べたところ、高校の学力が一定程度学習成果に影響を与えること、キャリアレディネスによって学びが異なることが示唆された。

(キーワード：キャリア教育, 大衆化した大学, 学習評価)

Analysis of Career Education in a University with Low SelectivityYoshikazu KOJIMA[†], Katsuhiko ISHIKAWA[‡]Faculty of management information, Yamanashi Gakuin University[†]Learning and education development center, Yamanashi Gakuin University[‡]

Abstract: The current study attempted to measure learning outcomes of a career education course at a university with low selectivity. The central goal of the course was to understand unstable labor market conditions today. Students were given some time to research a topic by themselves, and then discussed it with the teacher in each class. Short essays were regularly assigned to develop a study habit and reinforce knowledge acquisition. Most students who took this course highly evaluated the experience according to our survey. The survey also shows that learning outcomes are associated with grade at high school and differ according to different level of current carrier readiness.

Keywords: career education, university with low selectivity, learning assessment

1. はじめに

本稿の課題は、筆者(児島)が2016年度前期(4月初旬から7月末まで)にA大学2年生以上の学生を対象(履修登録25名)に行なったキャリア教育授業(「キャリア・デザインI」)を分析することである。A大学は入試偏差値50未満の学部が多数を占める相対的に選抜性の低い私立大学である(以下、「大衆化した大学」という言葉で表現する)。大衆化した大学の学生にどのようなキャリア教育授業を行なえばよいのかについて実践的示唆を

与えてくれる先行研究は少ない。代表的なものとしては、居神浩編『ノンエリートのためのキャリア教育論：適応と抵抗そして承認と参加』があげられる。居神は同書「まえがき」でノンエリートを「学校の勉強が苦手であった、あるいは成績が良くなかった」(居神, 2015)¹⁾層と一旦定義し、そうした学生を「ノンエリート大学生」という言葉で表わしている。同書では、居神の提起を受け、こうした層の学生に対する分析および実践提起が行なわれている。

同書の中で児島 (2015)²⁾は、ノンエリート大学生を偏差値 49 以下の私立大学生と設定し、かれらには次のような特徴があると指摘する。私立大上位学生 (偏差値 50 以上) と比べると、父学歴や職種が相対的に低く、大学入学以前から勉強が得意ではないものの、大学での勉強にはまじめに取りくんでいる。卒業後は規模の小さな会社で働く者が多く、販売・サービス業で働く者も多い、また非正規で働く者も多い。したがって、かれらに対するキャリア教育で重要なのは、卒業後に不安

定な社会の渡りかたをする可能性を見据えた授業内容であると提起している。他にも同書で葛城 (2015)³⁾は、先行研究および自身の研究から、こうした層の学生を学習に促すためには、①学習習慣や学習レディネスを身につけさせる②相互作用型授業を積極的に取り入れること③授業の意味を学生に十分認識させることが重要であると指摘する。相互作用型授業とは、グループワークへの学生参加、適切なコメントを付しての提出物返却等を行なう授業のことである。具体的に①であれ

【到達目標】

第一の目的は、現代社会の労働に関する基本的知識を獲得することです。第二の目的は、なぜ労働がこのような状況にあるのかを批判的に考察できるようになることです。

【授業内容】

現代社会において働くことは不安定化しています。働くこと不安定さは「5 年後、10 年後、それより先に私たちはどのようになっているのか」という見通しを立てることを難しくしています。本授業では、不安定化する社会を“したたか”に生きていくために必要とされる知識を学ぶだけではなく、安心して暮らせる社会をどうすればつくっていくのかを探求していきます。

本授業は、たくさん読み、たくさん書き、たくさん考えることを受講生に求めます。講義を受け身で聞いているだけでは身にならないからです。たくさんのかんことをしなければいけない授業ですが、最後まできちんとついてくれば、卒業後社会人になるうえで必要な基本的準備はできるようになると考えています。第 1 回目の授業には必ず出席してください。評価方法や授業に関するルールの詳細を説明します。

【授業計画】

- 第 1 回：オリエンテーション
- 第 2 回：なぜサービス残業をするのか
- 第 3 回：ブラック企業とはなにか
- 第 4 回：なぜフリーターになるのか
- 第 5 回：ミニレポート執筆とふりかえり
- 第 6 回：ブラックバイトとはなにか
- 第 7 回：「就活」とはなにか
- 第 8 回：労働とジェンダー
- 第 9 回：ミニレポート執筆とふりかえり
- 第 10 回：理不尽な働き方を変えるにはどうすればよいか
- 第 11 回：安心して暮らせる給料はどれくらいか
- 第 12 回：どうしてホームレスになるのか
- 第 13 回：ミニレポート執筆とふりかえり
- 第 14 回：まとめ
- 第 15 回：最終レポート執筆とふりかえり

図.1 シラバス

ば、定期試験 1 回で評価するのではなく、中間試験を複数回行なうことがあげられている。

居神らの研究は、本稿で取りあげるキャリア教育授業設計の手がかりとなった。しかし、授業全 15 回で何を取りあげ、毎回の授業をどう設計し、学生の学習活動を授業内また授業間で結びつけるかまでは明らかにされていない。この授業は、居神らの研究を具体的に展開したものといえる。本稿は、この授業が大衆化した大学の学生にどのような影響を与えたのかを分析するものである。

次節以降の構成は次の通りである。2 節では、「キャリア・デザイン I」の内容と運営について概観する。3 節では、受講学生を対象とした調査の設計と方法について概説する。4 節ではその分析結果について明らかにし、最終節となる 5 節では、それまでの内容をまとめるとともに今後に向けた課題を示すこととしたい。

2. 授業概要

2-1. 授業目標

本授業ではふたつの到達目標を置いた。ひとつは現代社会の労働に関する基本的知識獲得、もうひとつはそうした状況を批判的に考えられるようになることである。こうした目標設定にしたのは、若者を取りまく労働環境の不安定化がある。内閣府『子ども・若者白書 (平成 27 年版)』によれば、

2014 年の在学者を除く 15～24 歳の雇用者（役員を除く）のうち 30.8%が非正規雇用であり、女性では 37.4%に達している。およそ 3 人に 1 人の若者が非正規雇用となる。そして先述の先行研究で触れたように、私立大学の偏差値別に見ると、偏差値 50 以上の私立大学卒業の若者の正規雇用割合は 85.5%、49 以下の私立大卒業の若者では 73%となっていた (児島, 2015)²⁾。すなわち、「キャリア・デザイン I」受講学生は卒業後に非正規雇用にく割合が相対的に高い以上、現代社会の労働環境の不安定性について知っている必要があると考えたのである。それだけではなく、なぜ労働状況がそのようなことになっているのかを考察できることが重要であると思われた。「なぜ」と問うことは深い理解に到達するうえで必須というだけでなく、学生が卒業後に渡っていく社会が現在と同程度、あるいはそれ以上に不安定なものになるという教師である筆者 (児島) の想定があり、「なぜ～になっているのか」と反省的に考え、そうした力量を形成していくことは不安定化する社会を渡っていくうえで有意義と考えたためである。授業で取りあげた内容 (図.1) は、サービス残業、就活、ブラック企業、ブラックバイト等、不安定な労働環境を象徴し、かつ学生にとってわかりやすい事例であると思われたもの、加えてかれらが「自分事」として関心を持ちそうなものを選んだ。

表. 1 通常授業の展開と構成

時間配分	学生の活動	教師 (児島) の活動
【1】 0～20 分	・①準備学習 (予習) してきたものをワークシートに記載	・前週のワークシート (コメント付) を返却 ・ワークシートを配布し、準備学習 (予習) してきたものをワークシートに書くよう指示 ・机間巡視 ・学生と質疑応答 (ホワイトボードに書きながら)
【2】 20～40 分	・【情報収集】 教師からの問いを受けて、スマホや書籍、周りの学生と話しながら「②構想・回答」をワークシートに記入	・本日のテーマに関連した問いを発表 ・机間巡視 ・学生と質疑応答 (ホワイトボードに書きながら)
【3】 40～75 分	・学生、ワークシートにメモをとる	・資料を配布し、問いに関する説明を行なう
【4】 75～90 分	・教師の説明を受けて、ワークシートに「③授業内容のまとめ」を書き、あわせて「④感想・疑問等」を書き、教師に提出	・机間巡視 ・ワークシートを受け取る

<p>【2016年●月●日】キャリア・デザイン I (児島功和) 学科: _____ 学籍番号: _____</p> <p>名前: _____</p> <p>■準備学習(以下に書いてほしいもの: 記事タイトル、記事ソース、記事内容の簡単なまとめ、その他など)</p> <p>■(問いを受けた)構想・回答</p>	<p>■本日の授業内容のまとめ(感想ではなく、内容を中学生でも理解できるようにまとめること)</p> <p>■感想・疑問等(なんでも)</p> <p>* 書く場所が足りない(狭い)場合は空白を自由に使ってください * よくわからないときは児島にその場で聞いてください。また、まわりに聞いてみてください</p>
--	---

図.2 通常授業日に配布するワークシート

自分事として関心を持ってもらうことで、授業に積極的な意味付与がなされるであろうと想定した。

2-2. 授業運営と方法

第 5 回目, 第 9 回目, 第 13 回目のミニレポート執筆日, および第 14 回目, 15 回目以外の通常授業日は, 表.1 のような構成で授業を行なった。教

室に入ると, まず筆者(児島)が用意した A3 表面だけを使用するワークシートを配布した(図.2)。ワークシート表面には, 学科, 学籍番号, 名前を書く欄があり, それ以外には①準備学習②(問いを受けた)構想・回答③本日の授業内容のまとめ④感想・質問等の四つの欄があり, 授業中に学生はそこに必要事項を書き込んで, 授業最後に提出

【問題文】

非正規雇用と正規雇用の違いを説明し, そのうえでなぜ 1990 年代後半以降非正規雇用が増加したのか説明してください。

【修正前】

非正規雇用は正規とは違い, 働く期間を契約して決められる。いつでもクビが切れる。正規の半分の賃金で雇うことが可能。「バブル景気」という好景気が一気に破たんしたから。費用を削る面で, 企業側が目をつけたのは人件費だったから。

【修正後】

正規雇用とは無期雇用(雇用契約の期間をあらかじめ定めておかない), 直接雇用(間接労働である派遣労働ではない), フルタイム雇用(職場で定められた標準的な労働時間の勤務を行なう)の条件がある。それに対して非正規雇用とは, 上記の条件を一つでも満たさない働き方。1990 年代後半以降に非正規雇用が増加したわけは, 社会経済がいつ崩れるかわからないため, 企業側はいつでも人材カットができるようにしておくことや, 国による規制緩和やサービス産業説なども有力視されていることが原因に挙げられている。

図 3. 学生の回答例

する。

授業が始まると、学生はワークシートに学科・学籍番号・名前を書き、すぐに①の欄に事前に調べてきた労働に関するニュース記事のまとめを書きだす ([1])。これは基本的に毎回労働に関するニュースを調べ、タイトルと記事ソース、記事まとめをメモして授業に来るように指示しているためである。学生は大体 10 分程度で書きおわるので、学生がまとめたものに対して教師である筆者が質問をし、学生に答えてもらい、質疑応答の時間となる。20 分程度経過すると、次に筆者がホワイトボードに本日のテーマに関する問いを書く ([2])。例えば「なぜ非正規雇用は増えたのか」という問いである。すると、多くの学生はそれについてスマホを用いて調べだし、ある学生は筆者が教室に持ちこんだテーマに関連した書籍を手に取りパラパラと眺めはじめる。まわりの学生と問いについて話しはじめる学生もいる。それで一定時間が経過し、先ほどと同じように筆者が学生にその回答を尋ね、ホワイトボードに書き込むなどして、質疑応答を行なう。その後は筆者が新たに資料を配布し、一般的な講義・説明の時間となる ([3])。学生は筆者の説明を一通り聞くと、その内容をワークシートにまとめると同時に、授業に関する感想や質問を書き、提出して退室する ([4])。こうした授業方法は、宇田光の提唱する「BRD 方式」を一部変更し、用いたものである (宇田, 2005)⁴⁾。BRD は Brief Report of the Day の略であり、授業を教師があるテーマについて講義・説明する時間としてではなく、学生があるテーマについて情報収集し、当日レポートを執筆する時間として見立てた方法である。授業中の筆者は、質疑応答を行なう対話者として、また学生のレポート執筆のための情報提供者として自己を位置づけている。

第 5 回目、第 9 回目、第 13 回目のミニレポート執筆日は、それ以前の授業で扱った内容に関する問いを複数だし、それについて文章化する日となっている。例えば第 5 回目のミニレポート執筆日は、第 2~4 回目の内容について確認をする日となる。授業全体を通じて重視したのは、このミニレ

ポートの書きなおしである。ミニレポート執筆日に学生が書いたものに対して、翌週正解を表わすスタンプか不正解を表わすスタンプを押し、必要に応じてコメントをつけて返却した。しかしながら、それで終わりではなく、不正解の場合は基本的に翌週修正して再提出することを推奨した。不正解の箇所が修正されていれば修正点を与えた。「間違えた」「わからなかった」→「もういいや」で終わるのでは知識が身につかないままになってしまう。そのまま終わらせるのではなく、もう一度当該箇所について勉強しなおすことが必要ではないかと考えたため、このような設計にした。一例であるが、以下、ある学生の修正前と修正後の回答である (図 3)。修正後の回答が完璧というわけではない。例えばサービス産業説が何かが説明なしに使用されている。ただ、こうした書きなおしの機会を組みこむことで、学生の知識定着を企図したのである。

3. 方法

3-1. 調査方法・調査時期・回答者

それでは、受講学生はこの授業をどのように評価したのであろうか。具体的な調査方法であるが、受講学生に対し、授業時間を利用して回答を求めた。調査日は 2016 年度前期 15 回目 (7 月) の授業。15 回目授業の終わりに、以下の教示のもと回答を求めた。「この授業の振り返りを兼ねた調査用紙に回答してください。得られた回答は授業研究のデータとして利用され、それ以外の目的で使用することはありません。回答は任意であり、強制するものではありません。また回答の如何や回答の内容が成績に反映されることはありません。」

調査は自記式質問紙によるものと、自由記述によるもので行なった。回答数は前者が 22 名、後者が 23 名だった。

3-2. 質問紙調査項目の概要

以下が質問紙調査の項目となる。

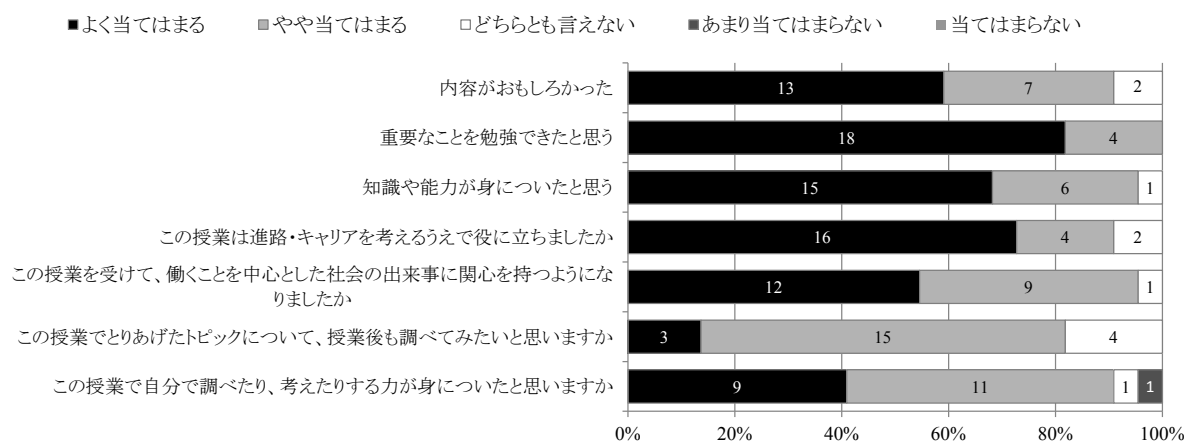


図 4 学習成果の単純集計

学習成果

(1)授業満足：授業にどれくらい興味を引きつけられたか、受講して充実感を得たかを尋ねるため「内容がおもしろかった」「重要なことを勉強できたと思う」「知識や能力が身についたと思う」の3

項目について「5 よく当てはまる」から「1 当てはまらない」の5件法で回答を求めた。(2)社会理解：進路や社会について考える切っ掛けになったかどうかを尋ねる項目群である。「この授業は進路・キャリアを考えるうえで役に立ちましたか」「この授

表.2 授業評価（自由記述）の分類表

カテゴリー	定義	例
授業内容		
労働観見直し	授業から刺激を受けて受講以前に保有していた労働観の省察・変化が生じた	例えばバイトの残業や深夜割増など細かく計算して給料明細を見るようになったことなど
労働自分ごと	労働・労働問題を自己に関連付け、自己課題化した	働くということを自分の人生に落とし込めたような気がしてる
自衛手段	授業から得た知識を労働市場・労働環境のはらむ暴力性からの自衛手段にできる	現代社会の厳しい現場やそれを乗り越えていくためにはどうしたらよいか、誰に助けを求めれば良いのかを知ることができた
知識充実	労働・労働問題について知っておくべき知識を得た	現代の労働や基本的な事、就職に関わることを教えてもらい
就活への活用	授業から得た知識・理解が、就職活動における会社選び、マッチング等に役立つ	就活中や就活をこれからする学生にとって企業や就職において必要なことだし身に着けるべき内容だと思う
役に立つ	主に、今後の職業生活の設計、主体的なキャリア形成を進めるうえで有用な知識・理解に至った	現代の労働や基本的な事、就職に関わることを教えてもらい、とてもこれからは繋がる授業だったなと思います
授業スタイル		
新鮮	これまで受講してきた授業スタイルと異なっている点新鮮	授業の方針として、全員を参加させるという新鮮なスタイルであり
楽しみ	予習課題、ワーク中心、双方向性の高い授業スタイルに楽しみを覚えた	毎回先生からコメントがあるし、けっこうコメントがかえってくるのが楽しかった
身につく	予習課題、ワーク中心、双方向性の高い授業スタイルが学習内容の定着に有効	タイムリー記事に対しその場で解説が入るのでとても新しいものとして自分のものにすることが出来た
大変そう	オリエンテーション、授業初期に予習課題、ワーク中心、双方向性の高い授業スタイルに驚きと不安を感じた	オリエンテーションのときに説明を受けたときは厳しそうだと思っていたが、実際に回数を重ねると知っていれば自分を守る内容がほとんどで
学習しやすさ	書き直し、振り返りによる定着支援など、学びを支援する環境整備が充実していた	レポートなどで、それまでの授業の振り返りができたし、自分はやったことをすぐ忘れてしまうタイプなのでいい機会だった

業を受けて、働くことを中心とした社会の出来事に関心を持つようになりませんか」「この授業でとりあげたトピックについて、授業後も調べてみたいと思いますか」とし、それぞれ「5よく当てはまる～1当てはまらない」の5件法で尋ねた。(3)リテラシー:「この授業で自分で調べたり、考えたりする力が身についたと思いますか」の1項目に回答を求めた。それぞれ「5よく当てはまる～1当てはまらない」の5件法で尋ねた。

学生背景

(1)勉強の得意苦手:大学での前年度の成績(A以上, B, C, D), 高校時の成績(上のほう, 真中の方, 下のほう), 高校時の勉強への選好(好きだった～嫌いだった, の5件法)の3項目を尋ねた。(2)キャリアレディネスに関する項目:「将来の職業は大体決まっております, いまはその実現に向けて努力している」「就職しないでいつまでも学生でいられたらいいのと思う」「これからの人生を, より充実したものになりたいと思う」「周りの雰囲気に合わせて, 人生を送っていけばよい」「これからの人生や生き方について, 自分なりの見通しを持っている」について, それぞれ「5よく当てはまる～1当てはまらない」の5件法で尋ねた。

3-3. 自由記述分析の概要

「最終レポート」と題し, ふたつの質問に自由記述による回答を求めた。一つは授業に対する率直な評価を求めるもので, 「この授業に対する評価とその評価をした理由を教えてください。点数で表してもいいですし, 文章でもいいです」とした。もう一つは授業のなかで改善すべき点を尋ねる質問で, 「『この授業, もっとこうすればいいのに』という改善点を教えてください。例えば授業内容, 教師の説明の仕方, 教師の質疑応答の仕方, 授業構成の在り方等」とした。得られた自由記述は内容の類似性に基づいて分類を行なった。まず記述内容に基づいて分類カテゴリーを生成した。分類のフィットが悪いと感じれば新たにカテゴリーを生成し, カテゴリーの名称を変更するなどカテゴリーそのものの変更を何度も行なった。すべての

記述の再分類の必要を感じなくなるまでカテゴリーの生成・統合を繰り返した。ひとつの記述は同時に複数のカテゴリーに分類を許す形で進めた。

分類の結果, 授業に対する評価の回答から表2の分類が得られた。大きくは授業内容に関わる分類と授業スタイルに関わる分類に分けることができる。授業内容に関わる分類については, 学生に授業内容がどのような学習上のインパクトを与えたのか, 6カテゴリー(「労働観見直し」「労働自分ごと」「自衛手段」「知識充実」「就活への活用」「役に立つ」)を生成した。授業スタイルに関する分類には, 授業が採用した授業スタイルに対する率直な反応や, 授業スタイルが学びに与えた影響などに関する記述がまとまり, 5カテゴリー(「新鮮」「楽しみ」「身につく」「大変そう」「学習しやすさ」)を生成した。

授業のなかで改善すべき点については, 5カテゴリー(「ペース」「シェア・話し合い」「予習課題」「アーティファクト」「ボリューム」)が得られた。この点については, 本稿後半で詳述する。

4. 分析結果

4-1. 学習成果

質問紙調査で学習成果を尋ねた項目への回答から, 学習成果について見てみる。具体的には授業に対する満足度(「おもしろかった」「重要なことを勉強できた」「知識や能力が身についた」)に加え, 社会理解(「役に立った」「社会の出来事に関心を持った」「授業後も調べてみたい」), そしてリテラシー(「自分で調べたり, 考えたりする力が身についた」)に与えたインパクトを自己評価してもらった。図4に学習成果指標の度数分布を示した。いずれの指標も「よく当てはまる」を中心に高い自己評価をつけている。受講したほとんどの学生にとって, この授業がよい学びの機会となっていたことがわかる。

社会理解の項目の中の「授業後も調べてみたい」は他の項目に比べ相対的に評価が低くなっている。労働は様々な形で一生関わってく事柄であることを考慮すれば, 人生・生活の一部として労働の問題について常時アンテナを張り続けることが望ま

しい。この点で一定の課題を残したと考えることができる。

続いて、授業に対する振り返り（自由記述）にもとづく分析結果も見てみよう。表2の11のカテゴリーそれぞれの言及頻度を図.5に整理した。最も言及頻度が高かったのは、「身につく」であった（39.1%）。双方向型、ワーク中心の授業が、学生の知識理解にとって有効だと実感していたことがわかる。図.5をより詳しく見てみると、授業開始当初「大変そう」などとしてネガティブに受けとられた経緯があることも示された（大変そう＝13.0%）一方、学習内容の定着に貢献している（身につく＝39.1%）、振り返りの機会が充実していたことから学習に集中できる授業スタイルだと感じていたこと（学習しやすさ＝30.4%）が伺えた。

授業内容の他のカテゴリーに注目して言及頻度を調べてみると（図.5）、内容が学生の今後のワークキャリアと直結する内容であると理解されていたことが特徴的だった。「役に立つ」との言及が

34.8%、働く際に自分自身が不当な扱いを受けないように「自衛手段」になるとの言及が26.1%だった。今後労働社会に参入することを想定したうえで、自分が様々な行動選択を行なうためのガイドになった、と感じた学生が多く存在したことがわかる。労働に関する知識が身についた（39.1%）といった回答や、労働というものが身近に感じられるようになった（17.4%）とする基礎的な知識・理解も十分に伴っていたことがわかる結果となっている。以下、学生の言葉を一部引用する。

近い将来社会の一員として働くために「知っておくべきこと」を知ることができる有意義な授業だと感じます。また、学んだことや新しく得た知識を基に、過去のアルバイト経験で起こったことに疑問を持ったり、将来職場でどういったことに気をつけるかなどを深く考える良い機会を与えてくれました。

充実したキャリアを歩んでいくために必要な知識を学ぶことができたと思っているから。

現代の労働や基本的な事、就職に関わることを教えてもらい、とてもこれからの繋がる授業だったなと思います。生きていくうえで、知らないといけないことなどを知ったりと、やりがいのあるものでした。

学生にとって社会は知らないことばかりなので、社会に出る前に、こうした学習を行なう機会があるというのは社会にでてから助かると感じたから。

4-2. 学生の背景と学習成果

学習成果は、学生の背景によってどの程度制約を受けたのだろうか。こうしたことに関心を寄せるのは、この授業が元々勉強の得意な学生にとってのみ良好な結果をもたらしているのではないかと考えたからである。

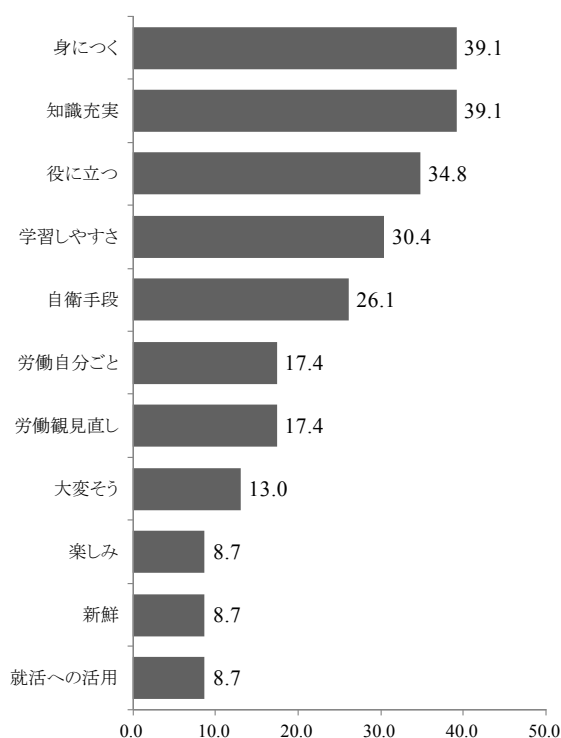


図.5 授業評価の分類カテゴリーの頻度 (%)

表. 3 高校時の成績と大学の成績の関連

		高校時成績			合計
		下の方	真ん中の方	上の方	
大学の成績	C	2	0	0	2
	B	4	10	1	15
	A以上	0	2	1	3
	合計	6	12	2	20

勉強の得意苦手との関連

勉強の得意苦手（高校での勉強への選好，高校での成績，大学での前年度の成績）とキャリアレディネスを取りあげ，学習成果との関連を探ることとする。まず，学生の勉強の得意苦手の状態を確認するため高校時の成績と大学の成績の関連性を調べたところ（表.3），関連性は見られなかった（ $\chi^2=7.556, p=.109, V=.435$ ）。カテゴリカルデータ同士の関連の強さを表す Cramer の V は $V=.435$ と中程度の値を示した。

表.4 には，高校時の成績（高校時成績），高校時の勉強の好き嫌い（高校時学業選好），大学の前年度の成績（大学の成績）と学習成果（授業満足，社会理解，リテラシー）との順位相関を示した。授業満足度の 3 項目は勉強の得意苦手と関係が見られないことがわかった。社会理解に関しては，一部勉強の得意苦手と関連が見られた。「働くことを中心とした社会の出来事に関心を持つ」は高校時の成績と，「とりあげたトピックについて，授業後も調べてみたい」は高校時の成績および高校時の勉強時の好き嫌いと関連をもった。いずれも，高校時の成績が良好なほど，高校時に勉強が好きであるほど得点が高い傾向にあった。その一方「進路・キャリアを考えるうえで役に立つ」という項目は勉強の得意苦手とは相関が見られなかった。勉強の得意不得意によって一部の学習成果に差が見られたが，全体的な傾向としては勉強が得意でなければ学べない，という傾向にはないと言えるだろう。

キャリアレディネスとの関連

表.5 に学習成果とキャリアレディネスの項目と

表. 4 勉強の得意苦手と学習成果の順位相関

	高校時成績	高校時学業選好	大学の成績
[授業満足]			
内容がおもしろかった	.25	.26	.18
重要なことを勉強できたと思う	.05	.36 ⁺	-.20
知識や能力が身についたと思う	.19	.05	-.14
[社会理解]			
この授業は進路・キャリアを考えるうえで役に立ちましたか	-.06	.04	-.13
この授業を受けて，働くことを中心とした社会の出来事に関心を持つようになりましたか	.44 [*]	.34	-.09
この授業でとりあげたトピックについて，授業後も調べてみたいと思いますか	.51 [*]	.44 [*]	.00
[リテラシー]			
この授業で自分で調べたり，考えたりする力が身についたと思いますか	.04	-.02	.05

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

の関連を示した。授業満足とはほとんど関連を持たなかったが，「いつまでも学生でいられたらいい」という項目が「内容がおもしろかった」と正の相関を示した。社会理解の項目との関連からは，学生のキャリアレディネスの状態によって授業から引きだした学びには一定のパターンが存在することが読みとれた。「進路・キャリアを考えるうえで役に立った」と答えているのは，「将来の職業は大体決まっており，いまはその実現に向けて努力して」いない学生であり，「これからの人生をより充実したものになりたい」と考えている学生だった。一方，「就職しないでいつまでも学生でいられたらいい」と考えている学生が，「内容が面白かった」「トピックについて授業後も調べたい」と回答している。キャリアレディネスが整っている学生とそうでない学生では，授業から引き出した学びに相違が存在していたといえるだろう。

表. 5 キャリアレディネスと学習成果の順位

	相関				
	1	2	3	4	5
[授業満足]					
内容がおもしろかった	.18	.46 *	.06	.25	-.08
重要なことを勉強できたと思う	.04	.27	.24	.08	.30
知識や能力が身についたと思う	.01	-.09	.21	.07	.21
[社会理解]					
この授業は進路・キャリアを考えるうえで役に立ちましたか	-.42 +	-.05	.52 *	-.10	-.23
この授業を受けて、働くことを中心とした社会の出来事に関心を持つようになりましたか	.27	-.20	.12	-.36	.07
この授業でとりあげたトピックについて、授業後も調べてみたいと思いますか	.34	.43 *	.14	.15	.01
[リテラシー]					
この授業で自分で調べたり、考えたりする力が身についたと思いますか	.29	.17	.14	-.37 +	.23

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Note. 表中の番号は以下の項目に対応する

- 1 将来の職業は大体決まっており、いまはその実現に向けて努力している
- 2 就職しないでいつまでも学生でいられたらいいのと思う
- 3 これからの人生を、より充実したものにしたと思う
- 4 周りの雰囲気に合わせて、人生を送ってほしい
- 5 これからの人生や生き方について、自分なりの見通しを持っている

表. 6 授業改善の分類表

カテゴリー	定義
ペース	ペースがはやい、ペースが授業によって異なる等
シェア・話し合い	学生同士で意見や疑問点をシェア・話し合いたい等
予習課題	予習課題を授業中に書くのではなく宿題にしてほしい、予習課題にもテーマ設定してほしい等
アーティファクト	映像資料のボリューム、板書等への要望等
ボリューム	1コマ当たりの情報量・ワークの量が多い等

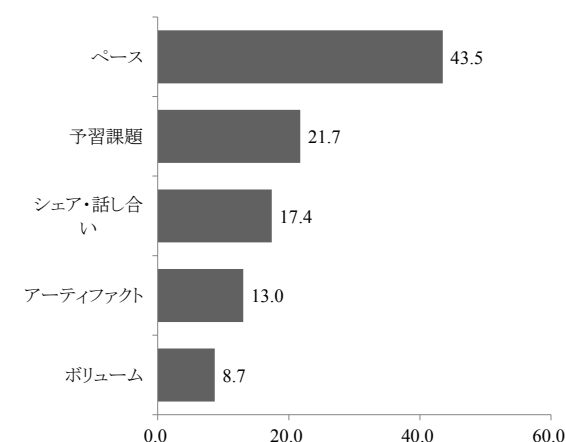


図. 6 授業改善の言及頻度 (%)

4-3. 授業改善に関する記述分類と分析

最後に、自由記述の分析から、学生が授業に対して抱いた改善すべき点について考察する。分類カテゴリーと定義を表.6に整理した。定義の項に記述した内容が具体的項目の例示ともなっているため、具体的な文例は省いた。各カテゴリーの頻度を図.6に整理した。ペースに対する言及が最も多く、ついで予習課題、シェア・話し合いと続いていた。

改善要求をどのように取り扱うべきだろうか。もし受講生の学習成果を阻害する要因となっているのであれば、これらの阻害要因は取り除く必要があるだろう。そこで、実際に学生の学習成果を損なっているかどうかを検討した。具体的には、授業改善要求の各項目への反応と、授業評価に関するカテゴリーのうち「身につく」「役に立つ」「学習しやすさ」の3カテゴリーの反応との関連を確認した。どちらも2値の反応データであるため χ^2 検定(イエーツの補正)を行なった。分析の結果、5%水準で有意な組み合わせは見られなかった

(表.7)。学習成果が阻害されているとは言えないと解釈できる。しかしながらこの結論には留保が必要かもしれない。サンプル数が小さく検定力が不十分である可能性がある。検定力を分析したところ、タイプIIエラーを生じる確率(β)は.93~.55であり、望ましい値である $\beta = .20$ を上回っていた。また効果量 V が.30(中程度の関連性と解釈できる(Cohen,1988)⁵⁾を上回った組み合わせも見られた。授業改善要求が学習の阻害と結びついている可能性もある。

5. まとめと課題

本稿では、大衆化した大学でのキャリア教育授業(「キャリア・デザインI」)について概観し、この授業を学生がどのように受け止めたのかを明らかにしてきた。

授業では、若年非正規雇用割合の高さに象徴さ

表. 7 授業改善要求と学習成果

		身につく					役に立つ					学習しやすさ				
		言及なし	言及あり	χ^2 ¹⁾	p	V ²⁾	言及なし	言及あり	χ^2 ¹⁾	p	V ²⁾	言及なし	言及あり	χ^2 ¹⁾	p	V ²⁾
ペース	言及なし	9	4	0.26	.61	.20	9	4	0.00	.99	.10	10	3	0.17	.68	.18
	言及あり	5	5				6	4				6	4			
シェア・話し合い	言及なし	10	9	1.44	.23	.37	12	7	0.00	1.00	.09	13	6	0.00	1.00	.05
	言及あり	4	0				3	1				3	1			
予習課題	言及なし	12	6	0.32	.57	.23	11	7	0.06	.80	.16	11	7	1.26	.26	.35
	言及あり	2	3				4	1				5	0			
アーティファクト	言及なし	11	9	0.73	.39	.31	13	7	0.00	1.00	.01	14	6	0.00	1.00	.02
	言及あり	3	0				2	1				2	1			
ボリューム	言及なし	14	7	1.18	.28	.39	13	8	0.09	.76	.23	14	7	0.03	.86	.20
	言及あり	0	2				2	0				2	0			

Note.

1)イェーツの補正を施した。

2)VはCramerの連関係数を表す。カテゴリカルデータ同士の関連性の強さの指標である。

れる不安定化する労働環境を積極的に取りあげた。大衆化した大学の学生は不安定な環境で働く可能性が高く、そうである以上、卒業前に深く考える機会が必要との判断が教師としての筆者（児島）にあり、授業内容はそうしたことを反映するものとした。日頃の授業では、学生がその日のテーマについてスマホ等を用いて情報収集し、教師による説明を参考にしながら、学んだことをまとめる時間として設定した。授業中は教師と学生との質疑応答を重視した。また、3回の授業ごとにその3回分の内容に関してミニレポート執筆を課し、学習習慣形成だけではなく知識定着を目指した。提出されたミニレポートは翌週コメントを付けて返却し、間違っただけを修正して提出すれば修正点を与えた。授業時の質疑応答だけではなく、それ以外でも双方向性の高い授業になるように工夫した。

受講した学生を対象とする質問紙調査では、「内容がおもしろかった」「重要なことが勉強できたと思う」「知識や能力が身についたと思う」「この授業は進路・キャリアを考えるうえで役に立ちましたか」等の質問で、ほとんどの学生が肯定的な回答をしていた。自由記述を分析すると、言及頻度で見ると上位カテゴリーは「身につく」「知識充実」「役に立つ」であった。「自衛手段」「労働観見直し」と分類できる記述も見られ、この授業の目標

は概ね達成できたと思われる。

学生の背景と学習成果を分析すると、勉強が苦手であることは授業満足とリテラシーには影響を与えなかった。一方「働くことを中心とした社会の出来事に関心を持つ」「とりあげたトピックについて、授業後も調べてみたい」に対しては、勉強が苦手であることで学びが損なわれる傾向が見られた。またキャリアレディネスの状態が異なることで、学生は異なった興味関心を持ち、引き出す学習成果にも多様性が存在することが見えてきた。授業改善に関する学生の自由記述を分析すると、ペースが早い、学生同士で意見や疑問点を話したい等が出された。これらのことが学習成果を阻害している可能性もある。

最後に、この授業の課題および分析の課題を述べておきたい。授業の課題としては、授業改善の分類表で示したように、突出して「ペース」のことが問題となっている。この点を是正していきたい。分析の課題としては、学生が実際どれだけ授業内容を理解したのかを明らかにすることがあげられる。今回の分析はあくまで学生の自己評価、学生が授業や自身の学びをどう考えたのかを明らかにしたものである。日々のレポートや定期レポート等、パフォーマンス評価に近い学習評価データを分析に組み込むなどして、この点を明らかにしておくことで、よりよい授業づくり、よりよい分

析に繋がると思われる。

参考文献

- 1) 居神浩編 『ノンエリートのためのキャリア教育論：適応と抵抗そして承認と参加』, 法律文化社, 2015.
- 2) 児島功和 「ノンエリート大学生を対象としたキャリア教育の射程：生活実態に根差した〈キャリア教育／支援〉に向けて」, 居神浩編 『ノンエリートのためのキャリア教育論：適応と抵抗そして承認と参加』, 法律文化社, 125-147, 2015.
- 3) 葛城浩一 「ボーダーフリー大学生が学習面で抱えている問題：実態と克服の途」, 居神浩編 『ノンエリートのためのキャリア教育論：適応と抵抗そして承認と参加』, 法律文化社, 29-49, 2015.
- 4) 宇田光 『大学講義の改革—BRD（当日レポート方式）の提案』, 北大路書房, 2005.
- 5) Cohen, J. Statistical power analysis for the behavioral science (2nded.). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, 1988.